



TITLE:

<サーヴェイ論文>道徳的個別主義 を巡る論争 -近年の動向-

AUTHOR(S):

蝶名林, 亮

CITATION:

蝶名林, 亮. <サーヴェイ論文>道徳的個別主義を巡る論争 -近年の動向-.
Contemporary and Applied Philosophy 2015, 6: 1001-1026

ISSUE DATE:

2015-02-16

URL:

<https://doi.org/10.14989/226261>

RIGHT:

道徳的個別主義を巡る論争 —近年の動向—

蝶名林亮

概要

The position called ‘moral particularism’ was suggested by several writers in 80s and various issues concerning the position have been lively discussed in the literature. In this survey paper, I shall attempt to explicate the main argument for the position and some of other relevant particularist claims. I shall also discuss some implications of the position.

The structure of the paper is as follows. In Section 2, I shall present so called ‘the argument from holism’ which is the main argument for particularism. In the latter part of this section, I shall present some controversies over the argument from holism, such as whether the holism of reasons for action is true and whether the holism entails particularism. In Section 3, I shall present some of other controversies concerning particularism which are not on the argument from holism. These controversies are on various issues concerning philosophy of language, moral psychology, normative ethics and moral epistemology which follow from particularism. In Section 4, I shall discuss some implications of particularism.

In the end of the paper, I shall indicate how further research on particularism and relevant discussions may flourish in the future. Given many fruitful research projects which may be pursued on the basis of the existing literature on particularism, I shall conclude that the particularism debate are going to remain as one of the central issues in moral philosophy.

Keywords: 道徳的個別主義 (moral particularism), 一般主義 (moral generalism), 理由の全体論 (holism of reasons), Jonathan Dancy

1 はじめに

近年、分析哲学系の倫理学において道徳的個別主義(moral particularism, 以下、「個別主義」と表記する)^{*1}と呼ばれる立場が提唱され、それを巡る議論が盛んに行われている。個別主義は McDowell (1979, 1981), Dancy (1983, 1993, 2004), McNaughton (1988)らによりその大枠の考えが示され、その流れの中で Dancy が *Moral Reasons* (1993), *Ethics without Principles* (2004) の中で示した個別主義擁護のための議論が主な論争の源泉となってきた。個別主義を主題とした論文集が 2000 年代に入ってから 2 冊刊行され (Hooker & Little 2000, Lance, Potrč & Strahovnik 2008), 現在にいたるまで分析哲学系の主要な研究誌で個別主義に関する研究論文が多く出版されてきた。

個別主義と一口にいても、いくつかの異なる主張が「個別主義的主張」として提示され、論じられている観がある。本稿で扱うそれら「個別主義的主張」とは以下のような主張である。

- ・道徳的な特徴(moral feature, 悪さ, 正しさ, 粗暴さ, 勇敢さ, など)とそれをもたらす他の特徴や条件の間の何らかの一般性を示すものとしての擁護可能な道徳原理は存在しない(以下、「擁護可能な道徳原理は存在しない」と表記する)^{*2}
- ・道徳語を理解し運用するにあたり道徳原理は必要ない
- ・道徳的判断は道徳原理を必要としない
- ・道徳的信念の正当化や道徳的知識の獲得に道徳原理は必要ない
- ・道徳的に適切な行為を行うのに道徳原理は信頼のおける指導原理ではない

これらはどれも「道徳原理(moral principles)が道徳において重要な役割を果たす」という主張への否定的な態度を含んでいる点で共通している (McKeever & Ridge 2005, p. 84)。ここで言う「原理(principles)」とは、「約束を破るのは悪い」「若くして死ぬことは長生きをすることよりも不幸だ」などで表現される何らかの一般性(generalizations)を具えた命題と考えることができる (Väyrynen 2011)。例えば、「約束を破るの

^{*1} ‘Moral particularism’は「道徳的個別主義」と訳されることが一般的なようだが、安藤 (2014) では「道徳的特殊主義」と訳されている。

^{*2} ここで言う「道徳的特徴」を何らかの仕方で存在する「道徳的性質(moral properties)」と捉えた場合、そのような道徳的性質の存在を認めない反實在論者はそもそも道徳原理を受け入れられないということになってしまう。反實在論者が道徳原理を受け入れる場合、性質に関するものとしてではなく、道徳的判断に関するものとして受け入れることが予想される。例えば、反實在論者は「嘘つきは悪い」との道徳原理の受け入れを、「どのような行為でもそれが嘘つきであった場合『その行為は悪い』と判断するという規範に従うこと」として理解するかもしれない。便宜上、以下の個別主義の解説の中では道徳原理を「性質間の一般性に関する命題」とするが、個別主義の議論は道徳原理を判断間の一般性として捉えた場合でもその効力を失わないと考えられる。以下で見るように、個別主義者は嘘をついても問題がない場合などを提示して「嘘は悪い」との原理を拒絶するが、この主張は、嘘と悪さという性質間の一般的な関係の否定にもなるし、全ての嘘のケースを悪いと判断することの拒絶にもなる。このように考えると、採用するメタ倫理学説に関わらず、何らかの形で道徳原理を保持しようとする場合、個別主義の議論は問題となることがわかる。

は悪い」という主張は、ある行為が約束の破棄という性質を有していた場合、その行為は悪さという性質を有することを示している道徳に関する命題であるように思われる。個別主義者はこのような原理が道徳において重要な役割を果たすことを、例えば約束の放棄と行為の悪さの間にそのような一般性はないと主張して、否定する。

個別主義に反対する立場は道徳的一般主義(moral generalism, 以下「一般主義」と表記する)と呼ばれる立場である。一般主義は道徳原理が道徳において重要な役割を果たすことを「認める」立場である。

個別主義は西洋倫理学の歴史の中でも「異端」な存在かもしれない。歴史を紐解いてみると、哲学者たちは何らかの道徳原理(定言命法, 功利主義の原理, 一見自明の義務, など)を主張している。これは、倫理学の歴史の中で一般主義がある種当然の考えとして受け止められてきたことを物語っている^{*3}。それにも関わらず、現在個別主義に関して盛んに論じられているのはなぜだろうか。

まず始めに指摘できる点は、個別主義が実は分析哲学系の倫理学を巡る議論の中で論じられてきたいわゆる「イギリス系道徳实在論」(British moral realism)の正当な流れを汲んでいる点である^{*4}。1970年代からそれまでメタ倫理学において支配的であった非認知主義に対抗して、悪さ・正しさ・残酷さといった道徳的性質は我々の主観的な判断とは独立して存在するという道徳实在論の擁護を目指す動きが活発化した。この動きの一つに主にイギリスの大学を研究基盤とする研究者たちによるものがあつた。彼らは正しさ, 悪さ, 勇敢さなどの道徳的性質は個々の状況下で我々に課される一種の要求(requirement)として現れると主張する(McDowell 1979, p. 331)。個別主義はこのような考えを継承・発展させたものとして見ることができる。即ち、イギリス系道徳实在論の「個々の状況下で行為に関する要求が課されている」という個別の状況の特有さを強調する主張が、「嘘は悪い」などの道徳原理の否定という個別主義的主張として展開されるに至った、と考えることができる。

個別主義を巡る主要な問いの一つが「理由」を巡る論争である点も論争を活発なものにしている一因であろう。近年、メタ倫理学において理由は論争の中心にある。それは、「なぜ道徳に従うべきなのか」という倫理学の根本問題や、価値や規範に関する事柄を、「行為の理由」(reasons for action)の観点から理解しようとする論者が多くなったことに由来する(Nagel 1970, Scanlon 1998 など)。彼らは、「太郎は他者に対して親切であるべきだ」などの規範的事実は、「太郎が他者に対して親切にする理由がある」などの理由に関する事実によって説明されると主張する。以下で見るように、個別主義は理由に関する独自の主張を展開して道徳原理の否定を試みるので、個別主義の主張は理由に関して大きな示唆を与える。理由

^{*3} 西洋哲学史の中でアリストテレスはむしろ個別主義的な倫理観を持っていたということがしばしば指摘されるが (Dancy 1993, p. 50, Leibowitz 2013), アリストテレス自身が実際に個別主義と呼べるような見解を持っていたかは議論の余地がある (Irwin 2000)。

^{*4} McDowell, J. 'Virtue and Reason', *The Monist*, July, 1979, pp. 351-350, 'Values and Secondary Qualities', in *Morality and Objectivity*, Honderich, T. (ed.), Routledge, 1985, pp. 110-129., Wiggins, D. 'A Sensible Subjectivism?' (特に p. 206), 'Truth, and Truth as Predicated of Moral Judgments' (特に pp. 155-160), in *Needs, Values and Truth*, Basil Blackwell, 1987, Platts, M. *Ways of Meaning*, Routledge and Kegan Paul, 1979, (特に pp. 243-247)など。イギリス系道徳实在論に対して、アメリカでは道徳と科学に類似性を見出して道徳实在論の擁護を目指す動きが活発化した。詳しくは Little 1994a,b を参照せよ。

がその探究の中心的課題であるメタ倫理学において、それに関して大きな示唆を与える個別主義を巡る論争が活発になるのは自明であろう。

このように現代分析哲学系の倫理学において重要な意義を持つ個別主義だが、その主張は何か。動機は何か。含意はどのようなものなのか。どのような点が論点となっているのか。これらの問いに答えるために、本稿ではまず個別主義の「擁護可能な道徳原理は存在しない」との主張を支える「理由の全体論からの論証」を検討し、この論証を巡る論争を見ていく。次に、個別主義のその他の主張及びその含意を概観し、それらを巡ってどのような論争があるのか、解説していく^{*5}。

2 擁護可能な道徳原理の否定—理由の全体論からの論証—

上述したように個別主義の主張の一つは「擁護可能な道徳原理は存在しない」だが、この主張の動機は何か。本章では個別主義の主要な擁護者である Jonathan Dancy が提示した「理由の全体論 (the holism of reasons) からの論証」(Dancy 1993, p. 57, p. 62, 2000, p. 130, 2004, p. 7) について解説し、その主な動機や論争点を概観する。

2.1 理由の全体論からの論証

Dancy は「擁護可能な道徳原理は存在しない」との個別主義の主張を擁護するために、「理由の全体論」(holism of reasons) という行為の理由に関する理論を提唱し、この説から導き出される主張として個別主義の擁護を試みている。

2.1.1 論証の概要

Dancy が提示する理由の全体論からの論証は以下のような形をとる。

《理由の全体論からの論証》

(前提1) 理由の全体論は真である。

(前提2) 理由の全体論は個別主義 (= 擁護可能な道徳原理は存在しない) を含意 (entail) する。

(結論) 個別主義は真である。(Dancy 1993, p. 60, 2000, p. 132)

以下で解説するように、この論証はその前提や前提から結論に至る推論について、様々な論争がある。本章ではそれぞれの前提やそこから結論へと至る推論について解説を行った上で、この論証を巡るそれらの論争を紹介する。

^{*5} 個別主義のサーベイとして、Dancy (2013) や McKeever, et al. (2008) がある。前者は、本稿で言うところの個別主義の「擁護可能な道徳原理の否定」との主張に関して集中的に論じており、後者はこの主張を「道徳概念の適切な運用の基準となるものとしての道徳原理の否定」と捉え直して検討を行っている。また、個別主義について日本語で書かれたものに、Dancy の議論を集中的に検討している安彦 (2007) や安藤 (2014)、動機付けの問題と個別主義の関係を検討した田村 (2004) がある。

2.1.2 理由の全体論(1)—定義—

はじめに、(前提1)の「理由の全体論」について解説する。Dancy は理由の全体論を以下のように定義している。

《理由の全体論》

もしcという状況下で、xという事柄(consideration)が ϕ する理由であったとしても、cでない状況下であれば、xは ϕ しない理由になるかもしれないし、 ϕ することに関して何の関係もない事柄にもなり得る (Dancy 1993, p. 60)*⁶。

この主張が全体論と呼ばれるのは、ある事柄の理由としての機能を他の事柄との関係において捉える包括的なアプローチであるからだ*⁷。太郎が次郎にバナナをあげる約束をしたとしよう。「太郎が次郎に約束をした」という事実(事柄)は、通常、太郎が次郎にバナナをあげる理由であろう。この場合、たしかに約束の事実は太郎が次郎にバナナをあげる理由であるが、理由の全体論によると、この理由関係の成立は太郎の約束の事実以外の様々な事柄に依っている。「約束が強制によるものではなかった」、「太郎は他の人にはバナナをあげる約束をしていなかった」、「次郎がバナナを手に入れることで苦しむ人はいない」、などの事実が成立しているが故に、上の理由関係は成立している。もし約束が強制によるものであったら、「太郎が次郎に約束をした」という事実は、太郎にとって次郎にバナナをあげる理由にはならないだろう。

理由の全体論は個別主義を巡る論争の中でも中心的に論じられてきた。Dancy 自身もその擁護のために理由の全体論について詳細な議論を行っている。そのような背景を受けて、以下で理由の全体論について、この理論がどのような理由に関するメカニズムを提示するのか、また、この理論は広く受け入れられている「道徳のスーパーヴィーニエンス」とどのような関係になるのか、さらなる解説を行う。

2.1.3 理由の全体論(2)—支持事由・反対事由・可能化事由・不可能化事由—

行為の理由が上の例のように状況によって変化するメカニズムを説明するために、Dancy はある行為に

*⁶ ここでの「 ϕ 」の領域は「行為」である。Dancy 自身は理由の全体論を「行為」の理由に関する説として提示している (1993, p.60, 2004, p.7)。だが、Dancy が展開する理由の全体論に沿ってこの領域を「信念」や「欲求」、「情動」などに拡張することもできるように思われる。また、理由の全体論はある行為を支持する (favour)「規範的理由」、もしくは「よい理由」(good reasons)に関する理論であり、ある行為がなぜ為されたのかに答える動機的理由 (motivating reasons) やある行為が規範的性質を有するのはなぜなのか説明する説明的理由 (explanatory reasons) に関する理論ではない。これら3種の理由の関係に関しては様々に論じられている。例えば、規範的理由はある行為がなぜ行われたのか答える動機的理由の役割も果たすかもしれない。また、本稿で扱っている Dancy は規範的理由と説明的理由を同種のものとしている (2004, p. 86)。本稿はこれら3種の理由の関係について特定の想定を持つことなく、「理由」は規範的理由を指すものとして、論をすすめる。

*⁷ Quine の全体論が、ある文の意味はその文とある経験との一対一関係の中で決定されるという「原子的な考え」に対抗するものであったのと同様に、理由の全体論も理由の原子論 (atomism) と呼ばれる主張に対抗するものとされる。理由の原子論によると、ある事柄の理由としての振る舞いは、その事柄の内容でのみ決定され、他の事柄との関係には依らない。例えば、理由の原子論によると、ある行為がいじめであるという事実は、そのいじめが行われた状況・背景に関わらず、その行為を控える (少なくとも) 理由の1つとなる。

対する支持事由 (favourer)・反対事由 (disfavourer) と呼ばれる特徴と、それ以外の可能化 (enabler)・不可能化事由 (disabler) との区別を提案する (Dancy 1993, p. 56-8, 2000, pp. 152-3, 2004, pp. 38-49) ^{*8}. これによると、「太郎が次郎に約束をした」という事実は、太郎が次郎にバナナをあげることを支持 (favour) している。また、この事柄は、太郎が次郎にバナナをあげないことに反対も (disfavour) している。Dancy はこれら支持・反対事由が行為の理由であるとする。一方、「約束が強制によるものではなかった」との事実は、約束の事実を支持事由にする働きをする可能化事由である。注意すべき点は、可能化・不可能化事由そのものは行為の理由ではないし、その一部ともならないことを Dancy が主張する点だ。Dancy によると、約束の履行の理由はあくまでその約束が交わされた事実であり、約束が強制されたものではなかったという事実そのものはその約束を履行する理由ではない (Dancy 2004, pp. 39-41)。

ここから導き出される帰結は、ある事柄が理由として振る舞うか否かは、その事柄に関係する可能化・不可能化事由の働きによって変化するということである。もし「約束は強制によってなされたものではなかった」などの可能化事由があれば、約束の事実は太郎にとって次郎にバナナをあげる理由になるが、「約束は強制されたものだった」などの不可能化事由があれば、約束の事実は太郎が次郎にバナナをあげる理由にならない。

2.1.4 理由の全体論(3)—スーパーヴィーニエンスと結果基底—

理由の全体論によると、ある事柄が行為する理由になるか否かは状況によるということになるが、だとすると、この考えは「道徳のスーパーヴィーニエンス (supervenience)」と両立しないようにも思われる。ここで言う道徳のスーパーヴィーニエンスとは、「もしある行為 x が道徳的性質 M を持つならば、他のどのような行為も x と同じような非道徳的性質を持つ場合、 M を持つ」との主張である (Dancy 2004, p. 86)。理由の全体論によると、ある非道徳的性質 (嘘つきなど) によって行為が悪くなるか否かは他の可能化・不可能化事由に依るので、行為が同じ非道徳的性質を持つならば同じ道徳的性質を持つとする道徳のスーパーヴィーニエンスとは両立しないようにも思われる。もし理由の全体論が多くの論者が受け入れている道徳のスーパーヴィーニエンスと両立しないのならば、メタ倫理学上かなり極端な説ということになってしまう。

このことに関して、Dancy は理由の全体論と道徳のスーパーヴィーニエンスは両立すると応答する。Dancy によると、道徳のスーパーヴィーニエンスが射程に入れている非道徳的性質とは、ある行為の支持・不支持事由や可能化・不可能化事由だけではなく、その行為が持つ全ての性質である。この理解によると、2つの数的に異なる行為があったとして、それらが全く同じ非道徳的性質を有していた場合、2つの行為は同じ道徳的性質を持つ。Dancy は理由の全体論はこのような考えと両立すると言う。その上で、理由の全体論が射程に入れているのは、ある行為に道徳的性質を「与えている (give)」, もしくはそれが「よっている (in virtue of)」非道徳的性質であると Dancy は言う。太郎が嘘をついたとして、この行為を悪く

^{*8} 安藤 (2014) は支持事由を「助勢事由」、反対事由を「反勢事由」と訳している。また、支持・反対事由と可能化・不可能化事由の区別に加えて、強化事由 (intensifier)・弱化事由 (attenuator) と呼ばれる行為の特徴も、理由の一部にはならないが他の特徴とは違う働きをするものとして、提案されている (Dancy 2004, pp. 41-2)。

しているのは、その行為が持つ「嘘つき」という非道徳的性質である。一方、この行為の全ての性質、例えば、「この行為は午前中に為された」などが、この行為に道徳的性質を与えているわけではない。Dancy は対象に道徳的性質を与えるこのような非道徳的性質を「結果基底 (the resultance base)」と名付け、これにより、「スーパーヴィーニエンス基底 (= ある行為が持つ全ての非道徳的性質)」と区別し、理由の全体論は前者に関する説であると論じる (Dancy 2004, p.86)。

2.1.5 理由の全体論擁護のための2つの戦略

理由の全体論からの論証によって個別主義を擁護する場合、その前提の一つである全体論を擁護する必要があるが、Dancy は全体論擁護のための二つの戦略を提案する。一つ目の戦略は、行為の理由が全体論的に振る舞うことを示唆する事例を実際にいくつか提出するというものだ。上の太郎と次郎の約束のケースは良い例であるし、他にも理由の全体論を支持する様々なケースが考えられる (Dancy 1993, pp. 56-62)。相手に嘘をついて点数を重ねていく「嘘つきゲーム」なるものがあつたとして、そのようなゲームに参加している場合、ある言動が嘘であるか否かは言動を控えたり促したりする理由にはならないだろう。

また、理由の全体論を「理由一般の説」として捉え、行為の理由も全体論的に捉えるべき、という結論に至る戦略もある (Dancy 2000, p. 132, 2004, pp. 73-78)。全体論を理由一般の説として捉えるということは、あらゆる種類の理由を全体論的に捉えるということである。ある信念を持つ理由である「理論的理由」 (theoretical reasons) は、それが全体論的に振る舞うことも予測できる。Dancy が訴える以下のケースを見てみよう (2004, p. 74)。ある対象が赤く見えるという事実は、通常の場合、その対象が赤いと信じる少なくとも一つの理由になる。しかし、もし私が、赤いものは青く、青いものは赤く見えてしまう薬を飲んでいた場合、対象が赤く見えることは、むしろそれが青いものだと思える理由になり、対象の赤さを信じる理由にはならない。このように、理論的理由も全体論的に振る舞うことが予想される。となると、同じ理由の一種である行為の理由も、全体論的に振る舞うことが予想できる。同じ理由の一種であるはずの行為の理由が理論的理由とは全く違う振る舞いをするのは考えにくいし、もし行為の理由だけ全体論的に振る舞わないということになると、それはなぜなのか、説明しなければならなくなる。

2.1.6 理由の全体論から個別主義への推論

次に論証の(前提2)について見てみよう。(前提2)によると、理由の全体論は「擁護可能な道徳原理は存在しない」との主張を含意している。この含意関係は、一見、当然のようにも思える。もし理由の全体論が真であれば、約束を破ることは常にその行為を避ける理由になるとは限らない。であるならば、約束に関する事実が常にその約束を守る理由とはならないということになる。その上で、「xは悪い」を「xを抑える理由がある」と分析できると想定した場合、「約束を破るのは悪い」などの原理は誤りであるということになる。となると、理由の全体論は「擁護可能な道徳原理は存在しない」という個別主義の主張を含意しているように見える。

2.1.7 総合的原理と貢献的原理

以上、理由の全体論からの論証の2つの前提に関して見たが、次に論証の結論である「擁護可能な道徳原理は存在しない」という主張を見てみよう。ここで存在が否定される道徳原理はいわゆる「総合的原理」(overall principles)と「貢献的原理」(contributory principles)の両方である。

総合的原理は、例えば「ある行為はそれが最大多数の幸福を最大化する場合、かつその場合においてのみ、正しい」など、その原理のみで、ある行為が正しいのか悪いのか示すことができる原理である。このような総合的原理を否定する論者もいるかもしれない。個々の場面の道徳的価値は様々な要素が複雑に絡み合うことで成立しているようにも見える。このような道徳の複雑性を考慮すると、総合的原理の擁護は難しい。だが、このような配慮をする論者は「貢献的原理」の存在は認めるかもしれない。貢献的原理は、その原理のみである行為が正しいのか悪いのか示すことはできないが、行為のある側面が「常に」その行為の道徳的価値に関係することを示すことができる。「嘘は悪い」を貢献的原理として捉えたとして。この場合、この原理は嘘をつくという行為が「常に」その行為の悪さに貢献することを示してはいるが、他の事柄もこの行為の全体的な評価(overall evaluation)に貢献している場合もある。「嘘をつくことにはなるがそのことによって他者の死を防ぐことができる」というケースを考えてみよう。このような場合、正しい行為は嘘をつくことであろう。だが、もし「嘘は悪い」との貢献的原理が成り立っている場合、この行為は、それが嘘をつくことであつたが故に、悪い側面も持ち合わせている。この悪い側面よりも他者を死から救うことができるという良さの方が強くこの行為の全体的な評価に貢献するが故に、この行為は全体としては正しい行為となる。ロスの「一見自明の義務」(prima facie duties)は、このような貢献的原理の例と見ることができる(Ross 1930, p. 20)。

総合的原理は、上の功利主義的原理が様々な論争を生み出している点からも分かるように、その擁護は容易ではない。それに対して、貢献的原理は総合的原理に比べ受け入れやすいように思われる。ある言動が嘘であるという事実は、実際は他の事柄が勝り嘘をつくことが認められるような場合もあるが、少なくともその言動を控える理由の一つには「常に」なるように思われる。

個別主義のラディカルな点は、総合的原理だけではなく、このような受け入れが容易に見える貢献的原理すらも否定する点にある。だがそれは、理由の全体論からの当然の帰結なのかもしれない。理由の全体論によると、たとえその行為が嘘をつくことであつたとしても、それがその行為を控える理由となっているか否かは、状況によって全く変わってしまう。もしそうであるならば、「嘘をつくことは悪い」という原理は、たとえ貢献的原理として与えられているとしても、誤ったものとならざるをえないだろう。

2.2 主な論争

以上、「擁護可能な道徳原理は存在しない」との個別主義的主張のため主要な論証である理由の全体論からの論証を概観した。以下で、理由の全体論からの論証に関してどのような点が論争となっているのか見ていく。

2.2.1 不変理由 (invariant reasons) に関して

上の論証への反論として、その前提の一つである理由の全体論を否定するというものがある。そのうちの一つに、どのような状況においても理由として一定の振る舞いをする「不変理由」(invariant reasons)が存在するとの主張がある。不変理由の例として以下のようなものが提案されている。①徳や悪徳は「常に」同じ理由を発生させる(Crisp 2000)。②ある行為が快楽を発生させるという事実はその快楽が他者の犠牲の上に成り立っているようなものでない場合、常にその行為を為す理由の一つになる(Hooker 2000, p. 8)。③ある行為が他者を利するという事実も、最終的には他のことが優先されるかもしれないが、少なくともその行為を為す理由の一つになる(Hooker 2000, p. 17)。

2.2.2 事例を挙げて理由の全体論を擁護するという戦略に関して

個別主義者は理由の全体論擁護のためにいくつかの事例を提出するが、この戦略は理由の全体論の真を支持するには不十分であるかもしれない(Shafer-Landau 1997, p. 590, McNaughton & Rawling 2000, p. 267)。理由の全体論を支持するよう見える例がいくつかあったとしても、そのような例示は不変理由が全くないことを示すことにはならない。たとえ Dancy が提示するような例が適切なもので、「嘘は悪い」などの原理が誤ったものであったとしても、まだ発見されていない、どのような場合でも例外が認められない道德原理があるかもしれない。

2.2.3 支持事由と可能化事由の区別に関して

理由の全体論によると、支持事由が行為の理由であり、可能化事由はある事柄が支持事由として働くことを可能にする触媒のような働きをするものである。この考えに対して、支持事由だけではある行為の「十全な理由」(complete reason)にならない、という反論がある(Crisp 2000, cf., Hooker 2008, pp. 18-23)。この反論によると、太郎が次郎と約束をしたという事実だけでは、約束の履行を支持する十分な理由にならない。むしろ、関係する可能化事由などが「理由の一部として」示されてはじめて、約束の履行を支持する十全な理由となる。

2.2.4 理由の全体論は行為の理由の説として不適格か

理由の全体論は理由の説として適切でないとの反論もある(Berker 2007, pp. 125-6)。行為の理由の分析の一つとして、「ある行為, P, の理由, x, があったとして, x は, それ以外に P の評価に関連する事柄がなければ, P を支持する事柄である」というものが考えられる。行為の理由に関するこのような分析はそれほど問題があるようには思えないし、むしろ、全ての理由の理論はこのような考えを保持しなければならないかもしれない(cf., Dancy 2003, p. 98)。しかし、理由の全体論はこの考えを否定しなければならない。というのも、上の考えは、もし他に関連のある事柄がなければ、ある事柄の理由としての振る舞いは「一定」である、というものであり、個別主義はこのような理由の一定性を否定する理論であるからだ。理由の全体論が上で示された理由の一定性を否定するのであれば、全体論は理由の説として適切なものではないということになってしまうかもしれない。

2.2.5 理由の全体論を理由一般の説とする戦略に関して

全体論の擁護のための戦略の一つは、全体論を理由に関する一般的な説として捉え、そこからの帰結として行為の理由を全体論的に捉えるというものであったが、この戦略についても反論がある。個別主義者は我々の信念形成に関する理由である「理論的理由」に関して、それが全体論的に捉えられることがあっても当たり前のように主張しているが、この主張には議論の余地がある。認識論において、基礎付け主義(epistemological foundationalism)は一つの可能性として論じられている立場だが、基礎付け主義によると、いわゆる「基本信念」(basic beliefs, 「 $1+2=3$ 」「私は今頭痛を感じている」など)は、阻却条件がなければ、「常に」、正当なものである。これは、ある種の事柄が(頭痛を感じているという心的事実、など)その事柄に関する信念が真であることを「常に」支持するという主張であるから、基礎付け主義は理論的理由の全体論とは両立しない立場だということになる(Hooker 2000, p. 14, 2008, p. 17)。全体論と両立しない基礎付け主義を認識論における有力な立場の一つとするなら、全体論を理由の一般的な説として捉えて行為の理由の全体論を擁護するという戦略には困難が生じる。

2.2.6 スーパーヴィーニエンスと結果基底に関して

上述したように、Dancy は理由の全体論を解説する中で、スーパーヴィーニエンス基底と結果基底を区別し、道徳的性質を成り立たせている非道徳的性質はスーパーヴィーニエンス基底ではなく結果基底であると主張している。これは、道徳的性質と非道徳的性質の関係がスーパーヴィーニエンスだけでは捉えきれないということを含意している。この主張に関しても、伝統的に論じられてきたスーパーヴィーニエンスという考えを使って Dancy が結果基底という考えを使用して捉えようとする道徳的性質と非道徳的性質の関係を捉えることができる、という反論がある(Strandberg 2008)。

2.2.7 理由の全体論は個別主義を含意するのか

理由の全体論からの論証において全体論は個別主義を含意する(entail)ものと考えられている(前提2)。この前提についても論争がある。

一見、理由の全体論と個別主義の間には非常に強い関係があるように思われる。実際に、個別主義者やその反対者も前者が後者を含意する(entail)すると考えているものが多い(Dancy 2000, p. 135, Stratton-Lake 2000, p.129)。だが、たとえ前者が後者を含意していなかったとしても、前者が真であることが後者の真を、少なくとも強く示唆するよう見える。Dancy は、たとえ前者が後者を含意しないと個別主義者が譲歩したとしても、擁護可能な道徳原理が成り立っていることは「宇宙的偶然」(cosmic accident)であり、そのような可能性は限りなく低いと主張する(Dancy 2004, p. 82)。

それにも関わらず、なぜそうでないこともありえるのだろうか。それは、理由の全体論が真であったとしても、「例外を認めない道徳原理」(exceptionless moral principles)が否定されるだけで、「例外を認める道徳原理」の可能性は残されているからだ。例外を認める道徳原理は、結局のところ「道徳原理」であるから、そのようなものがあるとすれば、どのような道徳原理も認めない個別主義は否定されることになる。

道徳原理を例外も許容できるものとして理解する戦略として、「ヘッジ原理」(hedged principles)

(Lance&Little 2004, 2006, 2008, Robinson 2006, 2011, Väyrynen 2006, 2009)と「非ヘッジ原理」(unhedged principles)という二つの考えが提案されている(Hooker 2008, pp. 23, McNaughton&Rawling 2000, pp. 266-72, Shafer-Landau 1997, pp. 593-4, McKeever&Ridge 2006)。「ヘッジ原理」との名称は、原理がその正当性を脅かしかねない例外をうまく処理する能力を備えていることを言いあらわすために用いられたものだ。これに対して、非ヘッジ原理は、例外的なケースを全て列挙することで、理由の全体論との整合性を保つことを目指す。上で示した支持・反対事由と可能化・不可能化事由の区別に沿って言えば、非ヘッジ原理はある支持事由が働くために必要な可能化・不可能化事由が全て列挙されている原理である。

2.3 小括

以上、理由の全体論からの論証を巡ってなされている7つの主な論点について見た。これらの論争は今後どのように進展するのだろうか。

(2.2.1)に関しては、倫理学の一階理論である規範倫理学における議論も関連があるかもしれない。ある徳倫理理論が正義の徳をマスター・ヴァーチャー(master virtue)として想定したとしよう。このようなマスター・ヴァーチャーは「常に」一定の理由を供給するものであると思われるから、この一階理論の擁護は同時に理由の全体論の否定にもつながるかもしれない。

(2.2.2)は個別主義と一般主義の論争上の問題点であるが、この反論が主張していることを深刻に受け止めた場合、個別主義者は例示だけでは立場の擁護につながらないことを認めなければならないだろう。その上で、例示によって何を示すことができるのか、明確にする必要が出てくる。例えば、例示は、少なくともいくつかの事柄が、理由として全体論的に振る舞うことは示すことができているのかもしれない。ここから、個別主義者が主張するようなラディカルな理由の全体論や個別主義がなぜ導き出させるのか、他の戦略を模索する必要があるのかもしれない。

(2.2.3) (2.2.4) (2.2.5)の論争を進めるためには、「行為の理由とは何か」「理由とはそもそもどのようなものか」という理由に関する立ち入った議論が必要になってくるように思われる。認識論で論じられている理論的理由と、倫理学で論じられている行為の理由の関係はどのようなものなのだろうか。どちらか一方を全体論的に捉えることは、もう一方を全体論的に捉えることを要求せざるをえないのか。全体論が示す支持事由と可能化事由の区別は、理由一般の説としてどれほど適切なものなのだろうか。これらの問いに答えるためには、行為の理由及び理由一般に関する立ち入った考察・検討が必要になるだろう。理由に関する説は多く提案されており(e.g., Broome 2004, Brunero 2013, Kearns&Star 2009, Raz 1999), それらを巡って様々な論争がある。理由の全体論は理由に関する諸説と照らし合わせるとどのような評価を受けることになるのか、今後の研究が待たれる^{*9}。

(2.2.6)は近年注目を集めている道徳的性質と非道徳的性質との間の「非因果的説明関係」を巡る論

^{*9} 理由の全体論は支持事由と可能化事由の区別を行うが、このような理由の個別化が形而上学的に適切なものであることを論じたものに Bader (forthcoming) による最近の研究がある。

争に大きく関わってくると思われる(Väyrynen 2013, Zangwill 2008). Dancy が主張するように、道徳的性質と非道徳的性質の間の説明関係はスーパーヴィーニエンスでは捉えきれないものなのだろうか. この説明関係は形而上学で論じられている「基礎づけ(grounding)関係」として捉えられるものなのだろうか. このような説明関係は道徳原理なしで成り立つものなのだろうか. これらの問いについては、形而上学で得られる知見を活かした横断的な研究が今後期待される.

(2.2.7)で示されている戦略については、この戦略をさらに進める動きも、個別主義者の応答も見られる. 以下で見るように、個別主義者でさえある事柄が「普通は」ある一定の道徳的価値を持つことを主張したいようであるから(4.1 を参照)、今後さらに論争がなされる分野と見てよいだろう. 論争のポイントは大きく二つに分けられる.

(a) ヘッジ原理を用いる戦略と非ヘッジ原理を用いる戦略の間の論争が考えられる. 前者と後者を比べた場合、どちらの戦略が優れているのか. 原理が許容する例外のケースが明記されていないヘッジ原理なるものは道徳原理が果たすべき機能(道徳的に正しい行為の提示、道徳的信念の正当化、反事実条件文の支持[「もし太郎の嘘が次郎の不幸を増長させるものであったら、彼の嘘は悪いものとなっていただろう」など]等)を持つのか. 非ヘッジ原理は通常の人間が運用できないほど複雑にはならないのか.

(b) ヘッジ原理を用いる戦略、非ヘッジ原理を用いる戦略、それぞれの戦略の内部で起こる論争も考えられる. このような内部での論争は、特にヘッジ原理を用いる論者の間で活発になされている. 例えば、ヘッジ原理が示すと思われる道徳の一般性(moral generalizations)や道徳の法則(moral laws)は道徳原理が果たすべき機能を持つのだろうか(Väyrynen 2008, 2009). もし道徳原理が指しているのが単なる道徳の一般性であった場合、しばしば科学哲学においてヒューム主義が自然的性質の間の必然性を認めないのと同様に、道徳原理が本来示すと思われる非道徳的性質と道徳的性質の間の必然性を示せないのではないのか. 道徳的原理の機能を果たすにはそれが示すものが「道徳的傾向性(moral dispositions)」と呼ぶことができるような性質でなければならないのではないのか(Robinson 2011).

ヘッジ原理を巡る論争は科学哲学における自然的性質や自然の法則を巡る論争と重なる部分が多く、この分野でも倫理学と形而上学の横断的な研究も期待される.

3 その他の個別主義的主張

以上、「擁護可能な道徳原理は存在しない」との個別主義的主張の動機は何かという問いに、その主な論証である理由の全体論からの論証を検討することで答え、その論証を巡ってどのような論争があるのか、概観した. 擁護可能な道徳原理の有無が個別主義論争の中で中心的に論じられてきたものであるが、個別主義の他の主張や、それらが含意するものについても、論争がある. 以下でそれらを見ていく.

3.1 道徳語・道徳的信念に関する個別主義

まず始めに、「道徳語・道徳的信念に関する個別主義」と呼ぶことができる主張を取り上げたい。これらは本稿冒頭であげた以下の主張である。

- ・道徳語を理解し運用するにあたり道徳原理は必要ない
- ・道徳的判断は道徳原理を必要としない

一見、道徳語の理解・運用や道徳的判断には道徳原理が必要のように思われる。我々は「正しい」や「悪い」などの道徳語を使い、「他者を利すのは正しい」、「殺人は悪い」、というように、正しい行為と悪い行為の区別を行うことができる(そのような区別が正しいか否かはここでは問題ではない)。このような区別は、非道徳的性質と道徳的性質との間に一種のパターンが想定されているからできることなのかもしれない。正しい行為には悪い行為にない何らかの非道徳的特徴が、そして悪い行為には正しい行為にない何らかの非道徳的特徴があるはずであり、それに基づいて我々は良い行為と悪い行為の区別をしていると考えられる。だが、「擁護可能な道徳原理は存在しない」とする個別主義者は、そのような良い行為(もしくは悪い行為)に共通の性質の存在を認めることができない。個別主義者は「嘘は悪い」などの道徳原理は擁護できないとするが、この道徳原理の内実は、嘘という非道徳的性質が例化している場合、必然的に悪いという道徳的性質も例化している、という両者の間にある必然的関係に関する主張である。個別主義者の主張はこのような必然的関係の否定である。それは、個別主義者が、ある非道徳的性質がある道徳的性質(正しさ・悪さ、など)を持つかどうかは、その性質が例化している状況によるから、非道徳的性質と道徳的性質の間に一般性はない、と主張するからだ。だが、そうすると、個別主義は実際に成り立っている言語学的事実(悪い行為と正しい行為の区別を行うことができるという事実)を説明できない説になってしまうかもしれない(Jackson, et al. 2000, pp. 86-7) *¹⁰。

このことが示すことは、我々が通常行っている道徳語の運用には何らかの道徳原理の想定が不可欠である、ということだ。これは、「道徳語を理解し運用するにあたり道徳原理は必要ない」との個別主義の否定である。道徳語の運用に道徳原理が必要だからといって、このことが道徳原理の適切さを示すわけではない。だが、正しい行為と悪い行為の区別の際に道徳原理が実際に運用されているという事実に対して、個別主義者はどのように応えるのだろうか。

また、上の議論は道徳的判断の性質に関する主張にもつながる。道徳語を使用して正しい行為・悪い行為の区別を行うということは、道徳的判断を下すことでもある。上の議論は、「太郎が嘘をついたのは悪い」「花子は間違いを言ったがそれは嘘ではなかったので悪くない」などの個別的道徳的判断も、「嘘をつくことは悪い」との道徳原理が想定されているが故に下されている判断であることを示唆している。これは、

*¹⁰ Jackson らはこの議論を展開するにあたり、非道徳的性質ではなく「記述的性質 (descriptive properties)」と道徳的性質との間のパターンを主張している。

個別的な道徳的判断も道徳原理に関する何らかの想定を必要とするということだ。もしそうであるならば、「道徳的判断は道徳原理を必要としない」という個別主義の主張は偽となる。

このような問題に対して、個別主義者からは以下のような応答が提出されている。この応答の中で、個別主義者は「道徳語を理解し運用するにあたり道徳原理は必要ない」「道徳的判断は道徳原理を必要としない」という主張の擁護を試みている。

(a) 道徳語の運用について

反論が想定しているパターンを否定することができる。ある行為は友情のゆえに正しく、ある行為は約束履行のゆえに正しかったとして、この二つの正しい行為の非道徳的性質に共通のパターンなどない。このことから、我々が正しい行為、悪い行為の区別を行うにあたり、反論が示しているようなパターンを想定することは適切ではない。だから、道徳語の運用に非道徳的性質と道徳的性質の間のパターンを想定する必要はない(Dancy 1999, p. 62)。

(b) 道徳的判断に関して

人工知能研究におけるコネクショニズムや機械学習の成果から(前例との比較による推論方法や、トランスダクションなど)、道徳原理によらずに正しい行為と悪い行為の区別を可能にする道徳的判断のモデルが提示できる。このようなモデルが道徳的判断を適切に捉えているのであれば、我々が道徳的判断を下すにあたり、道徳原理に関する想定は必要がないということになる(Dancy 1999, pp. 66-71, Harman 2005, Salay 2008, pp. 396-407)。

道徳語の意味や道徳的判断の性質に関してはメタ倫理学において伝統的に論じられてきた問題であったが、上で示された論争はこの伝統的な論争に新たな見解を提示するかもしれない。例えば、(b)で示された提案は、経験的知見に基づいて道徳的判断をモデル化しようという一種の自然主義的な試みであり、自然主義的世界観の中で道徳の位置を探究しようとするいわゆる道徳的自然主義者にとって、この分野の研究は一考に値する。

3.2 認識論的個別主義

次に、「道徳的信念の正当化や道徳的知識の獲得に道徳原理は必要ない」との個別主義の認識論的主張を見てみる。個別主義者が主張するように擁護可能な道徳原理がないのであれば、それらの原理が我々の道徳的信念(moral belief)の正当化や道徳的知識(moral knowledge)の形成に何の役割も果たさないということになるように思われる。個別主義者は道徳原理の認識論的な役割を否定するが、だからといって道徳的信念の正当化や道徳的知識を否定する懐疑論者にはならない。個別主義者は「嘘は悪い」や「殺人は悪い」などの一般的道徳事実は否定するが、「太郎が次郎にバナナを渡したことは正しい」「次郎が三郎にバナナを渡さなかったのは悪い」などの個別的な道徳事実に関する信念は、正当化され、知識

となることもある、と主張する。では、個別的道德事実に関する信念は道德原理なしでどのように正当化できるのだろうか。

個別主義者は道德的信念の正当化について、その信念の対象となっている状況(circumstances)が適確な形で物語的(narrative)に示されれば、その状況下で行為の理由になっている事柄が何か、明確にすることができ、道德的信念を正当化することができると主張する(Dancy 1993, p. 106, pp. 112-114)。

「ある状況を物語的に示す」とはどういうことなのだろうか。個別主義者は道德に関する物語的な記述を美学におけるケースとの類似性を見出しつつ論じる(Dancy 1993, pp. 112-3, Leibowitz 2009, pp. 188-189)。

例えば、タージマハルの美的価値はその物理的構造など(長さ・奥行き・材質など)を羅列するだけでは説明できない。そのような性質の羅列は「誤った」物語の語り方である。一方で、タージマハルの対称性や色彩などが適切な順番で、適切な形で語られれば、これらがなぜその美的価値に貢献するのか、わかるようにも思える。注意すべき点は、このような記述が何の一般性も前提にしていないことだ。対称性を備えている全てのものが美しいというわけではないし、タージマハルと同じ色彩を持つ建物が全て美しいわけでもない。それに関わらず、タージマハルの対称性や色彩が的確に語られた場合、私たちはその美しさを理解できるようにも思われる。

このような形で状況を記述することで、個別の道德的信念に正当化を与えることができるかもしれない。太郎が次郎にバナナをあげると約束したにも関わらず、バナナをあげなかったとしよう。この出来事の詳細な記述を示したところで(太郎がバナナを渡さなかった時刻・太郎の身長・体重・次郎の視覚や聴覚など)、なぜ太郎の行為が悪いものであるのか理解することはできない。このような仕方は「誤った」物語の語り方である。だが、太郎の行為が持つ特徴が、適切な順番で、適切な形で語られた場合、なぜ太郎の行為が悪いものであったのか、理解することができるとも思える。太郎の行為が次郎との約束を放棄することであったことが示され、さらに、その約束が強制などによるものではなかったことが述べられれば、この記述は、なぜ太郎の行為が、それが約束の放棄であったがために悪いものであったのか、我々に理解を与えるようにも思える。注意すべき点は、この記述も何ら道德原理を前提としてないということだ。この記述では、「約束を破るのは悪い」などの道德原理への言及はない。言及があるのは、このケースにおいて太郎の行為が約束を破るものであった事実と、その約束が強制によるものでなかったという事実のみだ。それに関わらず、このように記述されると、太郎が次郎にバナナをあげなかったことが悪かったことがわかるようにも思えるし、このことにより「太郎が次郎にバナナをあげなかったことは悪かった」との信念を正当化できるようにも思える^{*11}。

^{*11} 個別主義者が道德原理に依らずに個々の状況を物語的に記述することで道德的信念の正当化を試みることは、彼らが非因果的な道德的説明が道德原理に頼ることなく成立すると考えていることとも関連している(Dancy 1993, pp. 105-6)。個別主義者は、ある個別の状況において例化している非道德的性質は、それがその状況の道德的性質を説明するが故に、その状況に関する道德的信念を正当化するものであると考える。一般主義はこのような個別主義的説明を否定し、ある道德的性質の例化の説明には常に道德原理が必要であると主張する。このように個別主義と一般主義を巡る論争を道德における非因果的説明を巡る論争と捉えることもできる(Leibowitz

このような信念の正当化の方法について、物語の適確性の指標となる条件を示すことが困難であるとの理由から、現状ではまだ示唆的な提案に留まっているという批判がある (Väyrynen forthcoming). また、個別主義者自身がこの考えを積極的に発展させていないという現状もある (Roeser 2006, p. 33).

さらに、このような仕方での信念の正当化は、道徳認識論の見地から問題があるという反論もある。道徳的信念の正当化のオーソドックスな方法として「反省的均衡の方法」(the method of reflective equilibrium)があるが、上で示されたような個別主義的正当化の仕方はこの方法と相容れない。それは、反省的均衡の方法が、個別の道徳的信念と整合性がある道徳原理を探究することで、道徳的信念の正当化を目指す方法であるからだ。個別主義者は道徳原理が信念の正当化に貢献することを否定するのでこのような方法を採用することができない。このことから、個別主義は認識論的に不適切だと主張する論者もいる (Tännsjö 1995)。これに対して、ある個別の事例を物語的に説明するという手法も、例えば、「物語の評価に際してその一貫性に関する基準を設けることができるからある程度の客観性を保持することができる」という応答もある (Bakhurst 2000, pp. 174-175)。

道徳原理に訴えない個別主義的な認識論的見解を擁護する一つの方法として、直観主義者や道徳知覚を支持する論者らが示す「非推論的な」道徳的信念や知識の可能性について注目する、という戦略がある。

例えば、直観主義者は道徳的信念の中には他の信念からの推論によらないで正当化されるものがあると主張する。「幼児虐待は悪い」との信念は、「幼児虐待」の意味が理解されれば、それが悪いということがわかるようにも思われるから、他の信念からの推論を必要とせずに正当化することができるかもしれない (Audi 1998, 2006)。

一方、道徳知覚を主張する論者は、色覚が正常な人は色を知覚することができるように、道徳的性質もそのような性質に対しての適切な感受性 (sensitivity) を有している有徳な人によって知覚される、と主張する。たしかに、道徳的な感性に優れている人は、鈍感な人では気づくことができない、一種の道徳的要求 (moral requirement) に気づくことができるのかもしれない。道徳的に敏感な人は困っている友人に接した時にその友人を助ける必要性があることに気づくが、鈍感な人はそのような必要性に気づけないといったことがある。もし、このような「気づき」が色の視覚と同じような認識論的地位を持つならば、色の視覚が我々の色に関する信念を正当化するように、道徳のケースにおける気づきも道徳的信念を正当化できるかもしれない (Audi 2010, McDowell 1979, Blum 1991, Smith 2006, 2011)。

個別主義者はこのような直観主義者や道徳知覚論者の議論を用いて、示唆的な段階に留まっている「物語的記述による正当化」という考えを補完し、道徳原理に頼ることがない個別主義的道徳認識理論を提示することができるかもしれない。直観主義的な道徳認識論の擁護が近年活発になってきていることもあるので (Shafer-Landau 2003, Wedgwood 2007), この分野でのさらなる研究が待たれる。

3.3 指導原理としての道徳原理の否定

道徳原理は「指導原理」として行為を指導するという機能も持つと考えられてきた。例えば、「嘘は悪い」との原理は、嘘が悪いという道徳事実を示しているだけではなく、我々に嘘をつくことを控えるよう促している指導原理でもあろう。

個別主義はこのような指導原理としての道徳原理の否定という形もとれる。即ち、「道徳的に適切な行為を行うのに道徳原理は信頼のおける指導原理ではない」との主張だ。ここで言われている「信頼のおける指導原理」とは、「道徳的に適切な行為を為したいと望む人が、それを用いて道徳的判断を下すことで、適切に行為することができる原理」と考えることができる (Väyrynen 2008, p. 77)。

この種の個別主義は本稿第2章で論じられた「擁護可能な道徳原理は存在しない」との主張とは論理的に独立したものであるかもしれない。それは、たとえ擁護可能な道徳原理があったとしても、「指導原理としての」道徳原理には従うべきではない、と主張することができるからだ。例えば、道徳的真理を映し出す道徳原理はほとんどの人が理解できないほどに複雑なものであるかもしれない。そのような複雑な原理を指導原理としても、個々の状況でどのように行為をしてよいのか分からず、道徳的に信頼のおける行為を為すことができないかもしれない。このような場合、「擁護可能な道徳原理」は存在するが、それが我々の行為の指導原理とはならないだろう。

では、指導原理としての道徳原理への個別主義的反論の動機は何であろうか。個別主義者は以下のような動機を主張する。

(a) 道徳原理に従って道徳的な決定を下すことは誤った判断を生み出す因となる。それは、道徳原理に従って決定を下すことが個々の状況に特有な道徳的な関係のある事柄を見落とすことにつながるからだ (Dancy 1993, p. 64, p. 67)。例えば、ある殺人事件を評価する際に「殺人は悪い」との原理に従うのみであれば、その殺人事件に特有な事柄を見落としてしまい、正しい判断ができなくなってしまう可能性がある (殺人者は正当防衛のために相手を殺した、など)。個々の場面で正しい判断を下すために必要なことは、道徳原理に従うのではなく、道徳的感受性を発揮させることである。

(b) 道徳原理は複雑であったり抽象的であったりするので、我々が個々の状況においてどのように行為すればいいのか考える際に、具体的な指導を何ら与えることができない (cf. McKeever & Ridge 2006, p. 6)。「幸福を最大化すべきだ」との道徳原理はたしかに正しいかもしれないが、この原理だけでは実際にどのように行為すべきなのか、知ることができない場面が多々ある。

(c) 社会心理学などの見地を用いて、実際に人々が下している道徳的判断や決定を、道徳原理からの演繹を想定しないで説明することができる (Dworkin 1995)。もしそのような道徳原理を用いない道徳的判断・決定の説明が適切なものであった場合、そもそも人々は道徳原理に従って行為の決定を行っていない

いということになり、道徳原理は「実際に」何の指導的役割も果たしていない、ということになる。

これらの主張に対して以下のような反論が提出されている。

まずは(a)に関してだが、道徳原理の受け入れと道徳的感受性を持つことは両立するという反論がある。例えば、「嘘は悪い」という原理を受け入れることは「嘘がまかり通っている状況に敏感になる」ということになり、このような行為者は個別主義者の関心事である「個々の場面特有の道徳的に重要な事柄」を見落とさない道徳的感受性を有した行為者となることも予想できる(O'Neil 1975, Väyrynen 2008, p. 80, pp. 88-89)。

次に(b)に関してだが、指導原理とするべき道徳原理は目的に合わせて選定できる、という主張もある。実際に道徳的事実を映し出している原理は複雑で抽象的なものであるかもしれない。一方で、「嘘をついてはいけない」や「親切であるべきだ」などの原理は、我々が具体的にどのように行為すればいいのか比較的明確に示しているから、指導原理としては役に立つかもしれない。これらを、もっと複雑で抽象的な原理によって基礎付けられる派生的な原理として捉え、実際に我々の行為を指導するのはこのような実践的な原理である、と主張することができるかもしれない(Hare 1981, p. 173, pp. 199-201)。非ヘッジ原理は例外を認める場合を全て列挙するから複雑になるが、ヘッジ原理はそのような複雑性を有しないから使用可能である、という主張もある(Väyrynen 2008, pp 89-90)。

(c)に関しては以下のような反論がある。たしかに、実際に人々が下している道徳的判断は道徳原理に依拠しているものではないかもしれない。しかし、そのような判断を下している人々に、なぜその判断が正しいものだと言えるのか、反省を促すこともできる。そのような反省の中で、道徳原理が主張の正当化に使われるかもしれない。そして、その反省の結果、人々の行為のパターンに何らかの変化が現れることも十分に予測できる。もしそうであれば、道徳原理は人々が自らの行為を反省する中で重要な役割を果たすという意味において、指導原理としての役割を果たす、と主張することができる(McKeever&Ridge 2006, p. 219)。

個別主義を巡る論争において主題的に論じられてきたのは理由の全体論からの論証に関してであったが、それに比べると個別主義の指導原理としての道徳原理の否定とそれを巡る上のような論争はそれほど活発には行われてこなかった。このため、この分野でのさらなる研究が待たれている。

関連する問題として、道徳教育の分野で個別主義に対して提起されたものがある。例えば(a)に関して、もし個別主義者が主張するように道徳原理を教えることが被教育者が誤った判断を下すことを助長するのであれば、道徳教育においていかなる道徳原理も教えるべきではない、ということになるかもしれない。道徳教育には道徳原理の教授が欠かせないという考えもあり、個別主義を受け入れることは道徳教育の否定につながるという考えもあるが(Hooker 2000, p. 15)、このような考えに対抗して個別主義的な道徳教育理論の構築を目指す動きもある(Bakhurst 2005)。道徳教育に関しては「実際に」被教育者が道徳的に信頼のおける行為者に育つかどうか大きな関心事であるから、教育方法の効果に関する教育学、社会心理学などの見地も考慮に入れた学際的な研究が期待される。

4 個別主義が含意するもの

以上、個別主義の様々な主張を概観した。個別主義を巡る論争では、これら個別主義の個々の主張に関してだけでなく、個別主義の含意も論争の的となっている。以下でそのうちのいくつかを見ていく。

4.1 道徳の普遍化可能性に関する問題

第2章で見たとおり、個別主義の主要な主張は擁護可能な道徳原理の否定だが、これは、どのような事柄も、場合によってはその行為を正しくもするし、悪くもする、という主張を含意しているように見える。「いじめは悪い」と主張する人は、少なくとも多くの場合でいじめは悪く、いじめと悪さの間には何らかの強い関係があることを主張していると思われるが、個別主義者はこのような主張を拒絶しなければならないだろう。

このような個別主義の含意は、規範倫理学や応用倫理学において典型的に想定されている「道徳の普遍化可能性(universalizability)」を否定するものである。道徳の普遍化可能性とは、「もしある行為 x をその行為が持つ性質, R , によって正しいと判断した場合, R を持つ他の行為, y , も正しいものと判断しなければならない」との主張として理解できる(Hare 1977, Dancy 1993, p. 80)。

道徳の普遍化可能性を否定することは、「どのような事柄も道徳的に関連があるか否かはその事柄が発生している状況による」という主張につながる。これは、嘘をつくことなどが状況によっては道徳的に関連がなくなることを含意すると同時に、一般に道徳的にはそれほど関係がないと思われること、例えば履いている靴の色なども、場合によっては道徳的な意義を持つことも含意してしまう。それは、履く靴の色が殺人を命じる合図になるような状況を考えることができるからだ。このような場合、履く靴の色は道徳的に大変重要な事柄になる。となると、私の靴の色も、私が殺人を犯したかどうかと同じように、道徳的に関連のある事柄になり得るし、全く関連のないものにもなり得る。だが、このような考えは我々の道徳に関する考えに大きく反するものだ。私が殺人を犯したか否かは、私の靴が赤いかどうかよりも、明らかに道徳的に重要であろう。前者が道徳的により重要であるのに対して、後者がそうでないのはなぜか。一般主義者は「殺人は悪い」との原理が成り立っているが靴の色に関しては「赤い靴を履くのは悪い」との原理が成り立っていないと答えるだろう。個別主義者は道徳原理を否定するからこのように答えることはできない。もし個別主義者がこの点について適切な回答を示すことができなかった場合、それは個別主義を疑う一つの理由になるかもしれない(McNaughton & Rawling 2000, p. 268, McKeever & Ridge 2006, p. 22)。

個別主義者はこの問題を見做することも、一応は、できる。即ち、私が赤い靴を履いているかどうかと私が殺人を犯すかどうかは道徳的に同じような重要性を持つ、という非常識的な考えを受け入れる、ということだ。

一方、多くの個別主義者はこの問題を重視して、個別主義はこのような非常識的な含意を持たないと主張する。この主張の擁護のために個別主義者から二つの戦略が提案されている。

一つ目は、殺人は悪いなどの常識的な判断を必ず正しいわけではないがある程度の頻度で正しい解答を導き出すことができる一種のヒューリスティック (heuristic) として捉えるという戦略だ。これによると、「嘘は悪い」は、全てのケースで成り立っているような道徳原理ではないが、「嘘は悪くなり得る」ことは示しており、かつ、もし行為が嘘をつく言動を含んでいた場合、ある程度の頻度でその行為は悪くなることを示している。それに比べて、「赤い靴を履いているのは悪い」という主張も、たしかに赤い靴を履いていることでその行為が悪いものになることもあるので、全ての場合で誤った主張になるわけではないが、嘘に関するヒューリスティックに比べれば、それが適用される頻度が低いという意味において、信頼のおけるものではない。このように、殺人に関する道徳的ヒューリスティックは成り立つが、赤い靴に関するヒューリスティックは成り立たないという観点から、個別主義を受け入れても問題となっているような非常識的な考えを避けることができるかもしれない (Dancy 1993, p. 67)。

二つ目はデフォルト値 (default valency) という概念を使う戦略だ。ある事柄が道徳に関するデフォルト値を有していた場合、その事柄は、その値を打ち消す他の事柄がない限り、道徳的に関係のある事柄となる。この考えによると、殺人の禁止や約束を守ることなどは道徳的デフォルト値を有しているから、「殺さねば自分が殺されてしまう」、「約束が強制によって交わされた」などの特異な状況がない限り、殺人や約束の不履行は悪いものになる。一方で、私の靴の色が赤いことは、道徳に関するデフォルト値を有していないので、場面によっては道徳に関連することもあるが、普通の場合は道徳的に重要ではない (Dancy 1993, p. 26, 2004, pp. 111-7, Kirchin 2007, p. 20)。

これらの戦略に対してもいくつかの反論が提出されている (Stangl 2006, Väyrynen 2004)。反論に共通しているのは、「殺人は悪い」などの常識的な主張をヒューリスティックやデフォルト値を示すものとして捉えたとしても、それらが適用される通常の場合とはそもそもどのような状況なのか、その説明を個別主義を想定して答えることが困難であるという点である。「嘘は悪い」がヒューリスティックとして働く場面や嘘をつくことがデフォルト値を有している場面がどのような場面なのか、何らかの条件を加え始めると、最終的に何らかの道徳原理を認めざるを得なくなり、もともと保持していた個別主義的主張を捨てなければならなくなる可能性が出てくると思われるからだ。

道徳原理をヒューリスティックやデフォルト値を示すものとして理解することができれば、個別主義はそれほど極端な立場にならなくてすむが、果たしてこの戦略をとることで個別主義的主張が保持され得るのか、今後のさらなる研究が待たれる。

4.2 個別主義は社会に害悪を与える考えか

個別主義の個々の主張を深刻に受け止めた場合、道徳原理の様々な役割が否定され、「道徳原理は何ら重要な役割を果たさない」との主張に至り、原理中心の倫理学の放棄が推奨されるかもしれない。このような個別主義的主張が実際に社会で採用された場合、様々な弊害が起こるという反論がある。

その中の一つに、倫理学が原理の探究を放棄した場合、道徳原理を用いて社会の中で発生している悪を発見することできなくなってしまうという主張がある。「xの状態は不正である」という形式の道徳原理が

示されれば、この原理を使用して社会の中の道徳的に問題のある状態を発見できるかもしれない。「搾取は悪である」という原理に基づいてどの社会層が搾取を受けているのか分析することで、これまで見過ごされてきた不正が見つかることはよくあることであろう。だが、個別主義は道徳原理の使用を奨励しないから、このような形で社会の不正を見つけることができない。そうすると、見過ごされてしまう社会の不正などが出てきてしまう恐れがある(Nussbaum 2000, pp. 249-250)。

また、人々が個別主義を採用して道徳原理を全く信じなかった場合、彼らがどのように振る舞うのか予想ができないという観点から、個別主義の問題点を指摘する論者もいる。そのような社会では、人々は道徳原理に則って生きているのではなく、個々の状況に応じて判断を下して行動している。例えば、個別主義が採用されている社会では人々は約束が常に正しいとは思っていない。となると、たとえその社会の住人がある程度の道徳性を保持していると仮定しても、彼らがどの程度の頻度で約束を守るかどうか、全く予測ができない。というのも、彼らは、ある行為が約束を破るものであったとしても、その事実がその行為を悪いものとしているかどうかは状況による、と信じているから、状況によっては約束を破ることも十分に予想されるからだ。これは非常にやっかいな話である。人々が約束を守る頻度が予想できない社会では、あらゆる産業の発展において重要な約束に基づいた協力関係を結ぶことが難しくなる。このことにより、人々の福利に大きな影響が出ると思われるから、個別主義は、それが真であるか否かは別にして、悪い説である、ということになるのかもしれない(Hooker 2000, pp. 15, 2008, pp. 26-28)。

たとえ個別主義にこのような弊害があったとしても、それは道徳の理論的な説である個別主義の真偽には関係ないのかもしれない(cf. Parfit 1984, p. 23-4)。このように考えて、個別主義者は「擁護可能な道徳原理は存在しない」などの個別主義的な主張を理論的な説として限定して、道徳原理の実効的な効用は認めるという戦略をとることもできるかもしれない。だが、このような譲歩をする場合、「道徳原理は何ら重要な役割を果たさない」という強い個別主義的主張は改訂を迫られる。一方、もし個別主義者が道徳原理の実効的な効用を否定するのであれば、上のような問題がどのように克服されるのか、答えなければならない。

5 今後の展望

以上、近年の個別主義を巡る様々な論争を紹介した。個別主義を巡る論争は哲学の他の分野における論争と密接に関わっているものも多い。故に、個別主義を巡る論争から出発して、他の分野の論争に関する知見を得るということもあり得るし(理由の全体論を巡る論争が認識的理由に関する論争に何らかの影響を与える、など)、逆に他の分野における知見が個別主義を巡る論争に何らかの含意を持つこともあり得る(理由一般を巡る論争が個別主義を巡る論争に何らかの影響を与える、など)。また、個別主義は道徳原理に関する主張であるから、論争の中で道徳原理に関する理解が深まるという側面もある。

これらの点を踏まえて、個別主義を巡る論争で今後さらなる研究が期待できる分野を以下で列挙する。

(1) 理由の全体論と理由一般に関する研究 (本稿 2.1, 2.2 参照)

個別主義者がその主張を擁護するための論証で用いる理由の全体論は、理由一般に関する様々な説や論争とどのような関係になるのか。理由の全体論は理由一般の説としては受け入れ難いものなのか。理由の全体論は理由一般に関するある特定の説とだけ両立するのか。それとも、理由の全体論は理由一般の説の選択に関してはニュートラルであるのか。

(2) 道徳原理に関する研究 (本稿 2.1, 2.2.6, 3.3, 4.1 参照)

道徳原理とはそもそもどのようなものなのか。その果たすべき機能は何か。個別主義が強調するケースを考慮した場合、道徳原理はヘッジ原理として理解すべきなのか。それとも非ヘッジ原理として理解すべきなのか。これら例外を許容する道徳原理はその果たすべき機能を有するのか。

(3) 道徳的判断と個別主義に関する研究 (本稿 3.1 参照)

個別主義者が主張するような道徳原理によらない道徳的判断は可能なのか。人工知能や機械学習などの分野で提示されている推論方法を受容して、個別主義的道徳的判断のモデルを提示することは可能なのか。

(4) 道徳における非因果的説明に関する研究 (本稿 2.1.4, 2.2.6, 3.2 参照)

個別主義者が主張するように、道徳的性質と非道徳的性質の間の説明関係は道徳原理を必要としないのか。そのような個別主義的説明は、説明一般の議論で論じられているような説明が持つべき要求に答えることができるのか。

(5) 道徳認識論と個別主義に関する研究 (本稿 3.1, 3.2 参照)

直観主義者や道徳知覚を主張する論者らの議論を援用して、個別主義者は道徳原理によらない道徳的信念の正当化や道徳的知識に関する理論を提示することができるのか。

(6) 道徳原理の社会における役割に関する研究 (本稿 3.3, 4.2 参照)

倫理学の探究に際して、また社会の規範として、個別主義が採用された場合どのような影響があるのか。倫理学は期待されている不正の発見を道徳原理なしで果たすことができるのか。道徳原理の役割が否定された場合、道徳教育はどのようなものになるのか。道徳原理を用いない道徳教育は道徳的に信頼のける人格を養成することができるのか。

どの研究も倫理の研究において看過することができないものであるから、個別主義を巡る論争は今後も倫理学の中心的な課題の一つとなっていくだろう。

謝辞

本稿の作成に際して、秋葉剛史、小草泰、笠木雅史、吉沢文武、萬屋博喜の各氏より、また2名の匿名査読者、編集委員の神崎宣次氏より、有益なコメントを得た。この場を借りて感謝申し上げる。

参考文献

- [1] Audi, R. 1998. Moderate Intuitionism and the Epistemology of Moral Judgment. *Ethical Theory and Moral Practice*. vol. 1, pp. 15-44.
- [2] ———. 2006. Ethical Generality and Moral Judgment. in Dreier, J. (ed.), *Contemporary Debates in Moral Theory*. Blackwell, Oxford, pp. 285-304.
- [3] ———. 2010. Moral Perception and Moral Knowledge. *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume*. 84, pp. 79-97.
- [4] Bader, R. Forthcoming. Conditions, modifiers and holism. in Lord, E. et.al. (eds.), *Weighing Reasons*. Oxford University Press, Oxford.
- [5] Bakhurst, D. 2000. Ethical Particularism in Context. in Hooker, B. et al. (eds.), *Moral Particularism*, Clarendon Press, Oxford, pp. 157-177.
- [6] Berker, S. 2007. Particular Reasons. *Ethics*. vol.118, no. 1, pp. 109-139.
- [7] Blum, L. 1991. Moral Perception and Particularity. *Ethics*. vol. 101, no. 4, pp. 701-725.
- [8] Broome, J. 2004. Reasons. in Wallace, J. et al. (eds.), *Reason and value: Themes from the moral philosophy of Joseph Raz*. Oxford University, Oxford, pp. 28-55.
- [9] Crisp, R. 2000. Particularizing Particularism. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 23-47.
- [10] Dancy, J. 1983. Ethical Particularism and Morally Relevant Properties. *Mind*. vol. 92, no. 368, pp. 530-547.
- [11] ———. 1993. *Moral Reasons*. Blackwell, Oxford.
- [12] ———. 1999. Can the Particularist Learn the Difference between Right and Wrong? in Brinkman, S. (ed.), *The Proceedings of the Twentieth World Congress of Philosophy, i. Ethics*. Philosophy Documentation Center, Bowling Green, OH.
- [13] ———. 2000. The Particularist's Progress. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 130-56.
- [14] ———. 2003. What Do Reasons Do? *The Southern Journal of Philosophy*. vol. 41, pp. 95-113.
- [15] ———. 2004. *Ethics Without Principles*. Clarendon Press, Oxford.
- [16] ———. 2013. Moral Particularism. in Zalta, E.N. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/moral-particularism/> [accessed: 22/12/2014].
- [17] Dworkin, G. 1995. Unprincipled Ethics. *Midwest Studies in Philosophy*. 20, pp. 224-239.

- [18] Hare, R.M. 1977. *Freedom and Reason*. Clarendon Press, Oxford.〔山内友三郎訳『自由と理性』理想社, 1982 年〕
- [19] ———. 1981. *Moral Thinking*. Clarendon Press, Oxford.〔内井惣七・山内友三郎監訳『道徳的に考えること—レベル・方法・要点—』勁草書房, 1994 年〕
- [20] Harman, G.. 2005. Moral Particularism and Transduction. *Philosophical Issues*. 15, pp. 44-55.
- [21] Hooker, B. 2000. Moral Particularism: Wrong and Bad. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 1-22.
- [22] ———. 2008. Particularism and the Real World. in Lance, M. et al. (eds.), pp. 12-30.
- [23] Hooker, B. and Little, M. (eds.) 2000, *Moral Particularism*. Oxford University Press, Oxford.
- [24] Jackson, F. et al. Ethical Particularism and Patterns. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 79-99.
- [25] Kagan, S., 1992. The Structure of Normative Ethics. *Philosophical Perspectives*. vol. 6, pp. 223-242.
- [26] Kearns, S. and Star, D. 2009. Reasons as Evidence. in Shafer-Landau, R (ed.), *Oxford Studies in Metaethics 4*. pp. 215–242.
- [27] Kirchin, S. 2007. Particularism and Default Valency. *Journal of Moral Philosophy*. vol. 4, no.1, pp. 16-32.
- [28] Lance, M. Potrč, M. and Strahovnik, V. (eds.), 2008, *Challenging Moral Particularism*. Routledge, London.
- [29] Lance, M. and Little, M. 2004. Defeasibility and the Normative Grasp of Context. *Erkenntnis*. 61(2–3): pp. 435–455.
- [30] ———. 2006. Defending Moral Particularism. in Dreier, J (ed.), *Contemporary Debates in Moral Theory*. Blackwell, Oxford, pp. 305-21.
- [31] ———. 2008. From Particularism to Defeasibility in Ethics. in Lance, M. et al. (eds.), pp. 53-74.
- [32] Leibowitz, U. D. 2009. A Defense of a Particularist Research Program. *Ethical Theory and Moral Practice*. vol. 12, pp. 181-99.
- [33] ———. 2013. Particularism in Aristotle's Nicomachean Ethics. *The Journal of Moral Philosophy*. 10(2), pp. 121-147.
- [34] Little, M. 1996a. Recent Work in Moral Realism: Naturalism. *Philosophical Books*. 35.3, pp. 145-153.
- [35] ———. 1996b. Recent Work in Moral Realism: Non-Naturalism. *Philosophical Books*. 35.4, pp. 225-233.
- [36] ———. 2000. Moral Generalities Revisited. in Hooker, B, et al. (eds.). pp. 276-304.
- [37] McDowell, J. 1979. Virtue and Reason. *The Monist*. vol. 62, no.3, pp. 331-350.
- [38] ———. 1981. Non-Cognitivism and Rule-Following. in Holtzman, S. et al. (eds), *Wittgenstein: To Follow a Rule*. Routledge. London, pp. 141-162.
- [39] ———. 1985. Values and Secondary Qualities. in Honderich, T. (ed.), *Morality and Objectivity*.

- Routledge, London, pp. 110-129.
- [40] McKeever, S. and Ridge, M. 2005. The Many Moral Particularisms. *Canadian Journal of Philosophy*. vol. 35, no. 1, pp. 83-106.
- [41] ———. 2006. *Principled Ethics: Generalism as a Regulative Ideal*. Clarendon Press, Oxford.
- [42] ———. 2008. Preempting Principles: Recent Debates in Moral Particularism. *Philosophy Compass*. Vol.3, Issue 6, pp. 1177-1192.
- [43] McNaughton, D. 1988. *Moral Vision*. Blackwell, Oxford.
- [44] McNaughton, D. and Rawling, P. 2000. Unprincipled Ethics. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 256-75.
- [45] Nagel, T. 1970. *The Possibility of Altruism*. Princeton University Press, Princeton, NJ.
- [46] Nussbaum, M. 2000. Why Practice Needs Ethical Theory: Particularism, Principle and Bad Behaviour. in Hooker, B. et al. (eds.), pp. 227-255.
- [47] O’Neil, O. 1975. *Acting on Principle*. Columbia University Press, New York.
- [48] Parfit, D. 1984. *Reasons and Persons*. Clarendon Press, Oxford. [森村進訳『理由と人格—非人格性の倫理へ—』勁草書房, 1998 年]
- [49] Platts, M. 1979. *Ways of Meaning*. Routledge and Kegan Paul, London.
- [50] Raz, J. 1999. *Engaging reason*. Oxford University Press, Oxford.
- [51] Robinson, L. 2006. Moral Holism, Moral Generalism, and Moral Dispositionalism. *Mind*. 115, pp. 331-60.
- [52] ———. 2011. Moral Principles as Moral Dispositions. *Philosophical Studies*. 156, pp. 289-309.
- [53] Roeser, S. 2006. A Particularist Epistemology: ‘Affectual Intuitionism’. *Acta Analytica*. vol.21, pp. 33-44.
- [54] Ross, W.D. 1930. *The Right and the Good*. Clarendon Press, Oxford.
- [55] Salay, N. 2008. Thinking without Global Generalisations: A Cognitive Defence of Moral Particularism. *Inquiry*. vol. 51, no. 4, pp. 390-411.
- [56] Scanlon, T. 1998. *What We Owe Each Other*. Harvard University Press, Cambridge, Mass.
- [57] Shafer-Landau, R. 1997. Moral Rules. *Ethics*. 107, pp. 584-611.
- [58] ———. 2003. *Moral Realism: A Defence*. Clarendon Press, Oxford.
- [59] Smith, B. 2006. Particularism, Perception and Judgement. *Acta Analytica*. 21 (2), pp. 12-29.
- [60] ———. 2011. *Moral Particularism and the Space of Moral Reasons*. Palgrave Macmillan, Hampshire.
- [61] Strandberg, C. 2008. Particularism and Supervenience. in Shafer-Landau, R (ed), *Oxford Studies in Metaethics* 3. pp. 129-158.
- [62] Stangl, R. 2006. Particularism and the Point of Moral Principles. *Ethical Theory and Moral Practice*. vol. 9, no. 2, pp. 201-229.

- [63] Stratton-Lake, P. 2000. *Kant, Duty, and Moral Worth*. Routledge, New York.
- [64] Tännsjö, T. 1995. In Defence of Theory in Ethics. *Canadian Journal of Philosophy*. vol. 24, no.4, pp. 571-593.
- [65] Väyrynen, P. 2004. Particularism and Default Reasons. *Ethical Theory and Moral Practice* 7, pp. 53-79.
- [66] ———. 2006. Moral Generalism: Enjoy in Moderation. *Ethics*. vol. 116, No. 4, pp. 707-741.
- [67] ———. 2008. Usable Moral Principles. in Lance, M, et al. (eds.), pp. 75-106.
- [68] ———. 2009. A Theory of Hedged Moral Principles. in Shafer-Landau, R (ed), *Oxford Studies in Metaethics* 4. pp. 91-132.
- [69] ———. 2011. Moral Particularism. in Miller, B. (ed.). *The Continuum Companion to Ethics*. Bloomsbury, London.
- [70] ———. 2013. Grounding and Normative Explanation. *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume*, LXXXVII, pp. 155-178.
- [71] ———. Forthcoming. Reasons and Moral Principles. in Star, D (ed.) *Oxford Handbook of Reasons and Normativity*. Oxford University Press, Oxford.
- [72] Wiggins, D. 1987. A Sensible Subjectivism? in his *Needs, Values and Truth*. Basil Blackwell. [大庭健・奥田太郎監訳『ニーズ・価値・真理:ウィギンズ倫理学論文集』双書現代倫理学, 2014 年に収録]
- [73] ———. Truth, and Truth as Predicated of Moral Judgments. in his *Needs, Values and Truth*. Basil Blackwell, 1987.
- [74] Wedgwood, R. 2007. *The Nature of Normativity*. Clarendon Press, Oxford.
- [75] Zangwill, N. 2008. Moral Dependence. In Shafer-Landau, R. (ed.), *Oxford Studies in Metaethics* 3. Pp. 109-128.
- [76] 安彦一彦. 2007. 「倫理的個別主義批判(一) — ロス, ダンシーの個別主義 —」『DIALOGICA』滋賀大学 第 10 号: 1-30.
- [77] 安藤馨. 2014. 「道徳的特殊主義についての短い覚書」『神戸法学雑誌』神戸大学 第 63 号第 4 巻:85-115.
- [78] 田村圭一. 2004. 「倫理学における認知主義とその帰結 パティキュラリストの動機付けの理論」『哲学』日本哲学会 55 号: 206-217.

著者情報

蝶名 林亮 (創価大学非常勤講師)